

現代女子大生のスポーツ意識の動向

— 大学間の比較 —

東京女子体育大学 松 浦 三代子

スポーツ（意識・価値・欲求・行動・環境）

1. 研究目的

昨今、人々の意識・価値観は、物質的充足から心の満足・充足へ転換しつつあると言われている。スポーツも、従来の、訓練や競技を中心とした活動から、「楽しみ・健康・人間交流・創造」をメインとする傾向が増えている。特に女性のスポーツへの関心の高まりは目を見張るものがある。本研究は現代の女子大学生のスポーツにはたらく主体的要因と環境的要因からスポーツ意識の大学間の比較、検討を試みることにした。

II. 調査の方法

(1) 調査対象校 東京女子体育大学(T)152名、日本女子大学(N)136名、お茶の水女子大学(O)100名、福島大学(F)134名、

(2) 調査期日 平成2年4月下旬～5月中旬

III. 結果・考察

1. スポーツの価値

(1) スポーツの欲求 ①F・N・Oは運動欲求が（8割）高率で認められたが、Tは5割にも達しない。（ $p < .001$ ）。スポーツの価値については、4大学ともに、体力的側面>精神的側面>社会的側面（ $p < .001$ ）の価値を高率で等しく認めている。

(2) 健康意識 ①全体では8割の者が自分は健康だと思っている。また、7割の者は健康に注意をしている。しかし、体力に自信がない者が5割みられた。（ $p < .001$ ）。Tは健康への配慮、体力に対する自信に高率がみられる。

(3) スポーツ意識 ①体育授業に対する好悪、全体では7割の者は好きと答えている。②しかし、4大学生ともに、体育の授業では嫌な思いをしたことがある（7割）。その内容は、①うまくなれない、②むりやり、③授業の内容が面白くない、④ゲームをさせない、⑤努力しても認めてくれない等である。（ $p < .01$ ）

(4) スポーツの選好性 ①元来、若者はスポーツによる選好性を示すものだが本調査でも8～10割の高率がみられた。（ $p < .001$ ）、②スポーツで汗をかくことを好む（9割）。③運動習慣の不足を感じる（8割）。④スポーツに積極的に取り組む姿勢がみられない（6割）（ $p < .01$ ）。⑤現在行ないたいスポーツ種目は、1位エアロビクス・スキー・スキューパーが各3割、2位乗馬・テニス各2割、水泳・ゴルフ等があげられているが他は低率である。⑥将来行ないたい種目は、テニス・スキー各4割、水泳・エアロビクス各2割、スキューパー・バレーボールが各1割程度となっている。大学別では、種目の順位の移動はあるが、F大生のバレーボール、T大生のジョギング・マラソン・バレーボールが注目される。また、種目数も他大生に比し僅かながら多くみられる。（ $p < .001$ ）

2. スポーツ環境と大学生

(1) 日常生活と自由時間 ①1日の自由時間の量は2～3時間が最も多く、次いで4時間以上となる。Tは他3大学生に比し自由時間の量は少なく殆どない者（12%）がみられ、その不足が伺われる。（ $p < .001$ ）。②その過ごし方をみると「週日」では「テレビをみながらなんとなく過ごす」「友達付きあい」となっている。N大生に「スポーツ」24%がみられた。「週日」は心理的に開放されるためか行動半径が拡大し、Tのショッピング59%、Nの行楽・旅行33%などは注目される。（ $p < .001$ ）。しかし、6割の者(E)は自由時間の過ごし方にとまどいを感じるがあると答えている。

(2) 「みる」スポーツ ①テレビによるスポーツ観戦は、野球・バレーボール各4割、

テニス3割、次いでマラソン・スケート・サッカー・相撲等である。②直接会場で観戦した者は5割、その種目は野球3.5割、バレーボール・テニス等が1割程度みられたが、他は低率で種目数も少ない。③新聞のスポーツ欄には、Tが86%の高率で関心を示したが、他は5～6割である。

(3) 「する」スポーツ ①F・N・Oの学生は、スポーツをするための時間がなくてできないことを理由とする者が6割みられる。しかし、Tは「時間不足を感じない」(58%)みられたが専攻学科の特徴といえよう。(p<.001)。②自分専用のスポーツ用具類について、全体からみて、N大学生はスポーツ用具の保有率が高い。特にラケット類(87%)、スキー用具(45%)が目につく。対して、Tはそれらの種類に関しては保有率は低率であるが、シューズ・ウェア・武道着・用具等は他に比し高率を示している。③スポーツ施設の不足、またスポーツを楽しむための費用の不足(7割)をあげている。

(4) スポーツのケガ ①スポーツ実施中に体験したことのあるケガの種類について頻度の多い順にあげると、1.突き指、2.捻挫、3.打撲、4.腰痛、5.肉離れ・骨折・創傷となっている。特にT大生は他大生に比し、捻挫80%、腰痛55%、打撲47%、腱鞘炎22%、肉離れ20%、じん帯損傷15%は高率を示している。(p<.01)。

(5) 仲間関係、他 ①中・高校時代のクラブの所属状況を見ると、Tの他はいずれも高校時代になるとクラブ加入者は減ってくる。「全く加入しなかった」者がF-58%、O-53%、N-50%みられ大学間の差は著しい。因にTは中学時代のクラブ加入者は92%で高校時代には99%と増えている。専攻学科の特徴といえよう。(p<.001)。②現在のクラブ加入者はT-91%、N-70%、O-69%、F-42%である。(p<.001)。そのタイプは同好会5割、運動部4.5割、その他、スポーツ教室などとなっている。③いずれにせよ積極的に活動している(8割)、(p<.001)。④クラブに加入しない理由として、1.スポーツに興味・関心がない・時間的余裕がない各4割、2.アルバイトで忙しい2割、3.スポーツは好きでない2割などとなっている。(p<.001)。⑤スポーツ仲間の多寡については、T-88%>N-65%>O-46%>F-41%となっている。(p<.001)

3. スポーツと家庭環境

(1) 家庭環境 父母ともに、①よく遊んでくれた、②スポーツ活動に理解があった、③スポーツに興味を持っている、④市街地に居住していた者が多い、⑤遊び場は校庭・公園・家の周辺である。①～⑤(p<.001)

(2) スポーツ環境に対する希望 ①将来結婚後もスポーツを積極的に行ないたい(8割)。②自分の子どもにスポーツを勧める(9割)。③女性がスポーツ活動をするのには、夫や家庭の協力や理解が必要だと思う(9割)。いずれにも差がみられた。(p<.001)

(3) 国、行政 ①わが国のスポーツを発展させるためには種々の条件整備が必要である。学校体育施設や体育授業の内容を充実させるべきである(8割)。②勝れたスポーツ指導者の養成を望む(8割)。③国や行政はもっと醸金すべきだ(8割)。④オリンピックでメダルを獲得することも必要である(6割)。(p<.01)

(4) 今後のスポーツ生活の予測 10年後のわが国では、スポーツが生活の中で重要な位置を占めるとする者は8割、また、スポーツ人口も増加するだろうと7割以上の者が予測している。

Ⅳ. まとめ

スポーツ享受能力を規定する要因としてはその人の過去の経験や学習、第2にその人がおかれている現在の環境条件があげられるが、その他により根本的な要因として、その人の性格、態度、体力といった内的な要因があげられよう。彼女達は意識的には肯定的な答えがみられるものの、T大生の他は積極的とはいえない。余暇活動は多様で幅広いジャンルの種目によって構成されているので自由の生活や生き方とマッチしたスポーツ・レクリエーションが楽しめるように青年期から余暇能力の開発により多くの自由時間が当てられることが期待される。